

『仏祖正伝記』の研究

菅原研州

一、はじめに

『仏祖正伝記』⁽¹⁾（以下、本書）は、一三九九年（応永六）小春吉日に書かれた「序」から、沙門天性によって著された文献であると知られ、現在は『統曹洞宗全書』「寺誌・史伝」巻の「史伝部」に収録される。

内容は、過去七仏・西天二十八祖・東土二十三祖・扶桑七祖について、先行する灯史文献から伝記や大悟の機縁、伝法偈などを抄出したものである。

『統曹全』所収本の底本は、福井県小浜市永福庵所蔵の一卷一冊書写本（「序」の末尾に著者印が見えるため、著者自筆本の可能性がある）であり、筆者は他の写本等を見

『仏祖正伝記』の研究（菅原）

たことがない。

本論は、本書への基礎的な研究を行い、現段階で得られる諸知見を示し、また、更なる検討課題を挙げたいと考えている。

二、『仏祖正伝記』底本について

既述の通り、本書は、福井県小浜市永福庵に所蔵されている。同庵は、一七四一年（寛保元）に面山瑞方（一六八三〜一七六九）によって、同市内の別地域に建立され、明治期に入って現在地に移転された。

なお、同庵には面山所縁の所蔵品が多数収蔵されており、面山の法嗣・衡田祖量が著した『永福庵校割簿』⁽²⁾（一

七七九年「安永八」からは、面山遷化の段階で、同庵に本書が収蔵されていたことが知られる。

そこで、面山が本書を入手した経緯だが、『面山年譜』（『面山広録二十六』）には見えない。ただし、本書の著者・内容の関係から、面山が九州北部に所在していた際に入手したものか。

面山は肥後広福寺にて永平道元『御遺言記録』を見出し、本書も同類の一部と思われる。面山は『御遺言記録』について、「遺言記録を謄写して祖山に納むるの記」（『面山広録十九』）を著して、入手経緯や、謄写し永平寺に納めた経緯を明示している。また、自身度々書写しており、永福庵や京都宗仙寺等にも面山書写の同著を見ること出来る。

しかし、本書にはその様子が見えず、扱いが異なる理由が注目される。異なる理由について、本書では「代付」が肯定されていることを挙げることが出来る。「代付」とは、中国曹洞宗の大陽警玄―投子義青の師資において起きたことで、本書の「震旦十六祖 大陽警玄禅师章」によれば、「年八十、以て継ぐべき者の無きを嘆いて、遂に偈を

作り、並びに皮履・布直裾を浮山遠禅師に寄せ、為に法器を求めしむ」（三〇九頁下段、原漢文）とあり、「震旦十七祖 投子義青禅师章」では、「鑑、時に洞下の宗旨を出して、之を示す。悉く皆妙契す。付するに大陽の頂相・皮履・直裾を以て、囑して曰く、「吾に代わりて其の宗風を続け。久しく此に滞ること無く、善く宜しく護持すべし」（三二〇頁上段、原漢文）と述べたと記録される。

したがって、大陽―投子の師資の間に、臨済宗の浮山法遠が介在する「代付」が成立したことを認めている。一方で、本書の所持者であった面山は、江戸元禄期の宗統復古運動において正統とされた代付否定論に立ち、関連する文献を複数著している。中でも一七四一年に刊行された『洞上金剛杵』では、大陽―投子に関わる詳細な年譜を作って諸伝を批判し、両者は面授したと強く主張するに到る。⁴

よって、本書の著者天性は、後述するように永平門下の自負を持った人であり、その点では共通する面山ではあったが、思想的内容の問題から本書を出せる状況に無く、長年秘蔵されたまま、『続曹全』に収録されて世に知られたと思われる。

三一、『仏祖正伝記』著者の天性について

『曹全』「解題」で指摘される通り、本書の著者は「天性融石（然）」とされ、生年不詳ながら没年は一四二七年（応永三十四）であると伝わり、福岡県明光寺・大分県泉福寺、他で住持している。

その僧名だが、一八四五年（弘化二）に豊後国木馬庵妙田が著した『弘化系譜伝』では、第五巻に「（慈光）無雜融純」の法嗣として、「（明光）天性融然」（『曹全』「史伝（上）」巻、五六四頁）と紹介されている。

また、『曹洞宗文化財目録3』では、泉福寺の項目に「三十六世・天性融石」（八十二頁）とある。

つまり、天性には「融然」と「融石」という二つの名前が伝わる。しかし、本書の序には、「永平九代伝法沙門天性謹序」とのみあって、先の僧名は二つとも見えない。合わせて、永福庵所蔵本「序」の末尾には、上下二つの「印」が押されているが、下部の「瓶を象った印」には篆書で「天性」とのみ見え、それ以外に個人名を示す印は無い。上部の印は篆書で「永平派衆」と読め、天性自らの立

『仏祖正伝記』の研究（菅原）

場を端的に示した語句である。

また、泉福寺には、輪住した僧の記録である『豊後州妙徳山泉福禅寺 住帳』⁵⁾が残されており、「（応永）三十四丁未年 三十六世 天性 禅師 無雜」と記されている。前後の内容からは、天性は応永三十四年に三十六世として、無雜派から輪住したことになる。伝わる没年からは、最晩年であったといえる。

更に、『住帳』に記載される前後の輪住者名は、道号・僧名の四字で記載されることがほとんどだが、天性は異例であり（稀に、天性同様に二字の場合もあった）、最晩年に到っても、「天性」を名乗り続けていたと推定出来る。

本書では中国・日本で道号を持った祖師には、「号曰○」と割注で明示しており、道号が確認されない場合には、何も書かれていない（本論「四」の各仏祖名にて確認された）。その編集態度に鑑みて、天性は自らの名前を、ただ天性とのみ記載しており、それは、名前が天性のみであった可能性を示すものである。ただし、先に挙げた「融然」「融石」という僧名が付いていた可能性は、本師・無雜融純の僧名からも考えられることであるため、この問題

の決着は、更なる史料の発見に掛かっていると思われる。

三二、「永平九代伝法沙門天性」の自称について

前項の通り天性は、「永平九代伝法沙門天性」と自称している。具体的な嗣承は以下の通りである。各祖師の呼称は、初祖から七祖までを本書から、八・九代を『弘化系譜伝』第五巻から抄出した。

初祖 越州吉祥山永平寺〈開山〉道元禪師

二祖 越州永平懷奘禪師〈二世〉

三祖 賀州大乘〈開山〉義介禪師〈永平第三世也。号

を徹通と曰う〉

四祖 能州洞谷山永光寺〈開山〉紹瑾禪師〈大乘二世

也。号を瑩山と曰う〉

五祖 能州洞谷韶碩禪師〈号を我山と曰う〉

六祖 薩州永谷山皇徳寺〈開山〉円昭禪師〈号を無外

と曰う〉

七祖 豊州妙徳山泉福寺〈開山〉妙融禪師〈号を無著

と曰う〉

（八代）筑前明光寺無雜禪師 諱融純

（九代）筑前明光天性融然

九代の系図は以上の通りである。

続いて天性の思想的位置付けの考察を進めるが、「序」での自称と、前項で示した「印」の通り、天性には永平門下の意志があつたと思われる。なお、本書の成立が一三九九年であることは、「序」から知られるが、『曹全』「年表」に記載されている本書成立以前の文献で、本書同様の「永平〇代伝法沙門」に類する記述は、管見では未見である。一三〇八年に成立した『正法眼蔵抄』「出家」巻末尾に、経豪が「曹洞末塵沙門経豪」（『蒐書大成一四』四八一頁）と自著しているけれども、これでは永平門下の特色が出ない。

同様に、瑩山紹瑾（一三二五年没）に関わる著作には、永平門下であることを示す記述はあるけれども、世代数の記述を含めると「釈迦牟尼仏五十四世伝灯沙門」（禅林寺本『瑩山清規』）という表現が見られ、「永平門下の世代数」を含む自称は見えない。無論、瑩山が建立した永光寺五老峰の存在自体が、永平門下たる意思の表れだが、これは如浄から始まる系図であり、天性の自称とは意味合いが

異なっている。

この点で注目されるのが、通称「峨山石」である。永平寺承陽殿前にある「峨山承陽殿塔銘」には、「古仏第五之法孫峨山」（『永平寺史（上）』四六一頁参照）という峨山韶碩（一三六六年没）の自称が見える。真贋という観点では、大いに疑念を挟まねばならず、近世より前に遡れない可能性を知った上で、天性の自称と類似した呼称として挙げておきたい。

四、『仏祖正伝記』各則の出典について

『仏祖正伝記』の構成であるが、以下の通りである。

・七仏

毗婆尸仏から釈迦牟尼仏までが該当。各灯史に記載される伝法偈のみの記載。

・西天二十八祖

摩訶迦葉から菩提達磨までが該当。大悟の機縁と伝法偈を記載。

・震旦六祖（復以下一十七祖）

菩提達磨から天童如浄までが該当。史伝及び大悟の機

『仏祖正伝記』の研究（菅原）

縁と弟子との問答、伝法偈を記載。

・扶桑歴祖

道元から無著妙融までが該当。史伝を記載。

以下には各則（各則の名称は、筆者が便宜的に付けたもの）の出典を挙げ、また、『伝光録』本文との比較も行う（※で示す）。各章の仏祖の呼称は本書より抄出した。

また、出典と推定される文献との字句の相違について、a（第一出典）・b（第二出典）・c（参考資料）として判定を行う。その基準については、『道元引用語録の研究』に準じる。紙幅の関係上、各章の詳細なる検討は、別の機会に行うこととする。⁶⁾

・七仏

毗婆尸仏（過去荘嚴劫。第九百九十八尊）

a 『景德伝灯録』卷一・叙七仏

尸棄仏（荘嚴劫。第九百九十九尊）

a 『景德伝灯録』卷一・叙七仏

毗舍浮仏（荘嚴劫。一千尊）

a 『景德伝灯録』卷一・叙七仏

『仏祖正伝記』の研究(菅原)

拘留孫仏(見在賢劫。第一尊)

a 『景德伝灯録』卷一・叙七仏

拘那含牟尼仏(賢劫。第二尊)

a 『景德伝灯録』卷一・叙七仏

迦葉仏(賢劫。第三尊)

a 『景德伝灯録』卷一・叙七仏

釈迦牟尼仏(賢劫。第四尊)

b 『聯灯会要』卷一・釈尊章(偈)

a 『五灯会元』卷十五・開先善暹章(大地有情同時

成道)話)

※「大地有情同時成道」話は共通(類似性b)。

・西天二十八祖

第一祖 摩訶迦葉尊者

a 『聯灯会要』卷一・釈迦牟尼仏章(拈華微笑・多子

塔前話)

a 『景德伝灯録』第一・釈迦牟尼仏章(伝法偈)

※本書では「拈華微笑・多子塔前話」を両論併記する

のみで、『伝光録』で明らかに多子塔前説を選ぶ様

子とは相違する(類似性c)。

第二祖 阿難陀尊者

a 『聯灯会要』卷一・阿南章(倒却刹竿話)

a 『景德伝灯録』卷一・摩訶章(伝法偈)

※「倒却刹竿話」は共通(類似性c)。

第三祖 商那和修尊者

a 『伝光録』商那和修章(諸法本性話)

a 『景德伝灯録』卷一・阿難章(伝法偈)

※「諸法本性話」は共通(類似性a)で、他の典拠を

見出せず。

第四祖 優婆鞠多尊者

a 『伝光録』優婆鞠多章(身心出家話)

b 『景德伝灯録』卷一・商那和修章(伝法偈)

※「身心出家話」は共通(類似性a)。

第五祖 提多迦尊者

a 『景德伝灯録』卷一・優婆鞠多章(出家無我我話)

a 『景德伝灯録』卷一・優婆鞠多章(伝法偈)

※二話共に『伝光録』提唱中に挿入(類似性b)。

第六祖 弥遮迦尊者

b 『聯灯会要』卷一・提多迦章、『伝光録』弥遮迦尊者章(修仙学小話)

b 『景德伝灯録』卷一・提多迦章(伝法偈)

※「修仙学小話」は共通(類似性b)。

第七祖 婆須密尊者

b 『伝光録』婆須密章(置酒器話)

a 『景德伝灯録』卷一・弥遮迦章(伝法偈)

※「置酒器話」は共通(類似性b)。

第八祖 仏陀難提尊者

b 『五灯会元』卷一・婆須蜜章(仁者論議話)

a 『景德伝灯録』卷一・婆須蜜章(伝法偈)

※「仁者論議話」の後半部分のみ一致(類似性b)。

第九祖 伏駄密多尊者

a 『五灯会元』卷一・仏陀難提章(此家有聖人話)

a 『景德伝灯録』卷一・仏陀難提章(伝法偈)

※「此家有聖人話」は共通(類似性b)。

第十祖 脇尊者

a 『伝光録』脇尊者章(三年未曾睡眠話)

a 『景德伝灯録』卷一・伏駄密多章(伝法偈)

『仏祖正伝記』の研究(菅原)

※「三年未曾睡眠話」は『景德伝灯録』『五灯会元』に見えるが、字句から『伝光録』が共通(類似性a)。

第十一祖 富那夜奢尊者

b 『伝光録』富那夜奢章(華氏国憇一樹下話)

a 『景德伝灯録』卷一・脇尊者章(伝法偈)

※「華氏国憇一樹下話」は『景德伝灯録』『五灯会元』に見えるが、字句から『伝光録』が共通(類似性b)。

第十二祖 馬鳴尊者

a 『五灯会元』卷一・富那夜奢章(我欲識仏話)

a 『景德伝灯録』卷一・富那夜奢章(伝法偈)

※「我欲識仏話」は共通(類似性b)。

第十三祖 迦毘摩羅尊者

a 『五灯会元』卷一・馬鳴章(老人座前仆地話)

a 『景德伝灯録』卷一・馬鳴章(伝法偈)

※「老人座前仆地話」は共通(類似性b)。

第十四祖 龍樹尊者

a 『伝光録』龍樹章(赴龍王請受如意珠話)

a 『景德伝灯録』卷一・迦毘摩羅章(伝法偈)

『仏祖正伝記』の研究(菅原)

※「赴龍王請受如意珠話」は共通(類似性a)。

第十五祖 迦那提婆尊者

a 『五灯会元』卷一・迦那提婆章(龍樹知是智人話)

a 『景德伝灯録』卷一・龍樹章(伝法偈)

※「龍樹知是智人話」は共通(類似性c)。

第十六祖 羅睺羅尊者

a 『伝光録』羅睺羅多章(聞宿因感悟話)

a 『景德伝灯録』卷二・迦那提婆章(伝法偈)

※「聞宿因感悟話」は共通(類似性a)。

第十七祖 僧伽難提尊者

b 『伝光録』僧伽難提章(步天光話)

a 『五灯会元』卷一・羅睺羅多章(中流復現五仏影話)

a 『景德伝灯録』卷二・羅睺羅多章(伝法偈)

※「步天光話」「中流復現五仏影話」は共通(類似性

b)。

第十八祖 伽耶舍多尊者

a 『伝光録』伽耶舍多章(鈴鳴心鳴話)

a 『景德伝灯録』卷二・僧伽難提章(伝法偈)

※「鈴鳴心鳴話」は共通(類似性a)。

第十九祖 鳩摩羅尊者

a 『五灯会元』卷一・伽耶舍多章(見一婆羅門舍話)

a 『景德伝灯録』卷二・伽耶舍多章(伝法偈)

※「見一婆羅門舍話」は共通(類似性b)。

第二十祖 闍夜多尊者

a 『景德伝灯録』卷二・鳩摩羅多章、『五灯会元』卷

一・鳩摩羅多章(汝雖已信三業話)

a 『景德伝灯録』卷二・鳩摩羅多章(伝法偈)

※「汝雖已信三業話」は共通(類似性c)。

第二十一祖 婆修盤頭尊者

a 『景德伝灯録』卷二・闍夜多章、『五灯会元』卷

一・闍夜多章(常一食不臥話)

a 『景德伝灯録』卷二・闍夜多章(伝法偈)

※「常一食不臥話」は共通(類似性c)。

第二十二祖 摩拏羅尊者

a 『伝光録』摩拏羅章(何者即是諸仏菩提話)

a 『景德伝灯録』卷二・婆修盤頭章(伝法偈)

※「何者即是諸仏菩提話」は共通(類似性a)。

第二十三祖 鶴勒那尊者

b 『五灯会元』卷二・摩拏羅章（我有何縁而感鶴衆話）

a 『景德伝灯録』卷二・摩拏羅章（伝法偈）

※「我有何縁而感鶴衆話」は共通（類似性c）。

第二十四祖 師子尊者

a 『景德伝灯録』卷二・鶴勒那章、『五灯会元』卷

一・鶴勒那章（当何用心話）

a 『景德伝灯録』卷二・鶴勒那章（伝法偈）

※「当何用心話」は共通（類似性b）。

第二十五祖 婆舍斯多尊者

a 『五灯会元』卷一・師子章（求法嗣遇一長者話）

a 『景德伝灯録』卷二・師子章（伝法偈）

※「求法嗣遇一長者話」は共通（類似性b）。

第二十六祖 不如密多尊者

a 『五灯会元』卷一・婆舍斯多章（当為何事話）

a 『景德伝灯録』卷二・婆舍斯多章（伝法偈）

※「当為何事話」は共通（類似性a）。

第二十七祖 般若多羅尊者

a 『景德伝灯録』卷二・不如密多章、『五灯会元』卷

一・不如密多章（幼失父母話）

a 『景德伝灯録』卷二・不如密多章、『五灯会元』卷

一・不如密多章（得法至東印度話）

a 『景德伝灯録』卷二・不如密多章（伝法偈）

※「幼失父母話」は共通（類似性a）、「得法至東印度話」は後半のみ共通（類似性a）。

第二十八祖 菩提達磨尊者

a 『景德伝灯録』卷二・般若多羅章、『五灯会元』卷

一・般若多羅章（無価宝珠話）

a 『景德伝灯録』卷二・般若多羅章（伝法偈）

※「無価宝珠話」は共通（類似性b）。

・東土六祖（復以下一十七祖）

初祖 菩提達磨 円覚大師

a 『五灯会元』卷一・菩提達磨章（立雪断臂話）

a 『五灯会元』卷一・菩提達磨章（慧可安心話）

a 『五灯会元』卷一・菩提達磨章（汝得吾髓話）

a 『景德伝灯録』卷三・菩提達磨章、『五灯会元』卷

『仏祖正伝記』の研究(菅原)

一・菩提達磨章、他(伝法偈)

※「立雪断臂」は共通(類似性b)。

二祖 慧可大師(諡曰太祖禪師)

a 『五灯会元』卷一・菩提達磨章(外息諸縁話)

a 『五灯会元』卷一・慧可章(弟子身纏風恙話)

a 『五灯会元』卷一・慧可章(伝法偈)

※「外息諸縁話」は共通(類似性b)、「弟子身纏風恙話」は「卅祖鑑智大師章」に共通(類似性b)。

三祖 僧璨大師(諡曰鑑智大師)

a 『五灯会元』卷一・僧璨章(初以白衣謁二祖話)

a 『景德伝灯録』卷三・僧璨章、『五灯会元』卷一・

僧璨章(伝法偈)

※「初以白衣謁二祖話」は冒頭を除いて共通(類似性b)。

四祖 道信大師(諡曰大医禪師)

a 『五灯会元』卷一・道信章(子何姓話)

a 『景德伝灯録』卷三・道信章、『五灯会元』卷一・

道信章(伝法偈)

※「子何姓話」は「卅二祖・大満禪師章」と共通(類

似性b)。

五祖 弘忍大師(諡曰大満禪師)

a 『五灯会元』卷一・弘忍章(嶺南人無仏性話)

a 『五灯会元』第一・弘忍章(五祖六祖付法話)

a 『景德伝灯録』卷三・弘忍章、『五灯会元』卷一・

弘忍章、他(伝法偈)

※「嶺南人無仏性話」は共通(類似性b)、「五祖六祖付法話」は「卅三祖・大鑑禪師章」に共通(類似性b)。

六祖 慧能大師(諡曰大鑑禪師)

a 『景德伝灯録』卷五・慧能章、『五灯会元』卷一・

慧能章、他(伝法偈)

※該当箇所無し。

七祖 吉州青原山静居寺行思禪師(諡曰弘濟禪師)

a 『五灯会元』卷五・青原行思章(聖諦亦不為話)

※「聖諦亦不為話」は共通(類似性b)。

八祖 南嶽石頭希遷禪師(諡曰無際大師)

a 『五灯会元』卷五・石頭希遷章(直造曹谿話)

a 『五灯会元』卷五・青原行思章(尋思去話)

a 『景德伝灯録』卷五・青原行思章(子何方而来話)

※「子何方而来話」は「卅二祖・大満禪師章」と共通(類

a 『景德伝灯録』卷五・石頭希遷章、『五灯会元』卷

一・石頭希遷章、他(号石頭和尚話)

※四話とも共通(類似性b)。

九祖 澧州萊山惟儼禪師(謚曰弘道大師)

b 『五灯会元』卷五・萊山惟儼章(萊山契悟話)

※「萊山契悟話」は共通(類似性b)。

十祖 潭州雲巖曇晟禪師(謚曰無任大師)

b 『五灯会元』卷五・雲巖曇晟章(雲巖大悟話)

※「雲巖大悟話」は共通(類似性b)。ただし、部分的に『伝光録』本文に近い言い回しが見られるため、『五灯会元』『伝光録』の合採か。

め、『五灯会元』『伝光録』の合採か。

十一祖 瑞州洞山良价禪師(謚曰悟本禪師)

a 『五灯会元』卷十三・洞山良价章(無情説法話)

※「無情説法話」は共通(類似性b)。

十二祖 洪州雲居道膺禪師(謚曰弘覺禪師)

a 『伝光録』雲居道膺章(見洞水悟道話)

b 『伝光録』雲居道膺章(關梨名什麼話)

※二話とも共通(類似性a・b)。

十三祖 洪州鳳棲山同安道不禪師(洪州人)

a 『伝光録』同安道不章(四恁麼話)

※「四恁麼話」は本来、雲居道膺の示衆語だが、同話を道丕の大悟の機縁にしているのは共通(類似性a)。

a)。

十四祖 洪州同安觀志禪師(洪州人)

a 『伝光録』同安觀志章(如何是和尚愛処話)

a 『五灯会元』卷十四・同安觀志章(多子塔前宗子秀話)

話)

※「如何是和尚愛処話」「多子塔前宗子秀話」は共通(類似性a・b)。

十五祖 鼎州梁山縁觀禪師(明州人)

b 『伝光録』梁山縁觀章(如何是衣下事話)

※「如何是衣下事話」は共通(類似性b)。

十六祖 郢州大陽山警玄禪師

a 『聯灯会要』卷二十七・太陽警延章(如何は無相道場話)

a 『五灯会元』卷十四・太陽警延章(浮山代付話(前半))

半))

※「如何是无相道場話」「浮山代付話(前半)」ともに

『仏祖正伝記』の研究(菅原)

共通(類似性b)。

十七祖 舒州投子義青禪師

a 『五灯会元』卷十四・投子義青章(浮山代付話(後半))

※「浮山代付話(後半)」は共通(類似性b)。

十八祖 東京天寧芙蓉道楷禪師

a 『五灯会元』卷十四・芙蓉道楷章(芙蓉開悟話)

※「芙蓉開悟話」は共通(類似性b)。

十九祖 鄧州丹霞子淳禪師

a 『伝光録』丹霞子淳章(従上諸聖相授底話)

※「従上諸聖相授底話」は共通(類似性a)。

二十祖 真州長蘆清了禪師(号曰真歇。諡曰悟空禪師)

a 『五灯会元』卷十四・長蘆清了章(襌襟入寺話)

※「襌襟入寺話」は共通(類似性b)。

二十一祖 明州天童宗珎禪師(号曰大休)

a 『伝光録』天童宗珎章(近日見処如何話)

※「近日見処如何話」は共通(類似性a)。

二十二祖 明州雪竇智鑑禪師(号曰足庵)

a 『五灯会元』卷十四・雪竇智鑑章(母与洗手傷話)

a 『伝光録』雪竇智鑑章(雲居懸記話)

a 『五灯会元』卷十四・雪竇智鑑章(世尊密語上堂話)

※三話とも共通(類似性a)。なお、「雲居懸記話」は

『伝光録』に見える。

二十三祖 明州天童如浄禪師

a 『伝光録』天童如浄章(不曾染汚話)

a 「洞谷伝灯院五老悟則并行業略記」如浄章(後在浄

慈作浄頭話)

※「不曾染汚話」は共通(類似性a)。

・扶桑歴祖

初祖 越州吉祥山永平寺(開山)道元禪師

a 『永平寺三祖行業記』道元章(道元伝)

※「道元伝」はほぼ共通だが、相違する文脈もある

(類似性c)。

二祖 越州永平懷奘禪師(二世)

a 『永平寺三祖行業記』懷奘章(懷奘伝)

※「懷奘伝」はほぼ共通だが、相違する文脈もある

(類似性c)。

三祖 賀州大乘〈開山〉義介禪師〈永平第三世也。号曰

徹通〉

a 『永平寺三祖行業記』義介章(義介伝)

四祖 能州洞谷山永光寺〈開山〉紹瑾禪師〈大乘二世

也。号曰瑩山〉

参考『洞谷五祖行実』瑩山紹瑾章(父母所生眼悉見三

千界話)

c 『洞谷記』(如何知平常心話)

出典不明(素哲・韶碩拔群話)

五祖 能州洞谷韶碩禪師〈号曰峨山〉

a 『景德伝灯録』卷五・永嘉玄覺章(精天台止観話)

参考『峨山和尚法語』、『僧生和尚法語』(語黙動静総

是総不是話)

出典不明(月有二枚話)

六祖 薩州永谷山皇徳寺〈開山〉円昭禪師〈号曰無外〉

出典不明。江戸期以降の諸伝と一致せず。

七祖 豊州妙徳山泉福寺〈開山〉妙融禪師〈号曰無著〉

出典不明。江戸期以降の諸伝と一致せず。

『仏祖正伝記』の研究(菅原)

以上を検討した結果、天性は本書を編む際に、『伝光録』を中心に、『景德伝灯録』『五灯会元』『聯灯会要』『永平寺三祖行業記』『洞谷伝灯院五老悟則并行業略記』等を手元に置き、参照・引用しながら著したと推定される。

特に、西天三・四・七・十・十一・十四・十六・十七・十八・二十二祖、東土十二・十三・十四・十五・十九・二十一・二十二・二十三祖については、『伝光録』に依拠して著されたと考えるのが妥当である。なお、『伝光録』は提唱録であり、特に乾坤院本では本則までも典拠本来の漢文を開いて記される場合があるため、漢文体の本書とは厳密な形で一致する場合は少ないけれども、天性が『伝光録』を参照しながら、その典拠となる本則を各灯史に当たって編成したと類推出来る。

一応、別の仮説としては、『伝光録』のみに知られる本則が本書にも見えることから、『伝光録』成立に寄与した、何らかの灯史・史伝を天性が保持した可能性は想定出来るけれども、現段階でそのような文献の存在は不明であり、仮説以上のことではない。本論も、『伝光録』が参照されたと仮定して論を進める。

元々、『伝光録』には釈尊以来、インド・中国・日本の三国の歴代祖師を、提唱者である瑩山の受業師・永平懷奘まで一本で繋げているのが特徴との評価があり、「おそろく、日本禅宗史上、こうした内容の語録は、他に類を見ないであろう」（東隆真博士「乾坤院本伝光録解題」、乾坤院本一一七頁）という先行研究の指摘の通りであれば、本書は明らかに『伝光録』の特徴を受け継いだ一本である。しかも、成立・書写年代が本書「序」の通りに一三九九年であるとすれば、十五世紀中頃までの書写とされる『伝光録』最古の乾坤院本を数十年遡ることになり、その意義は極めて重大である（仮説としては、本書から『伝光録』が作り出された可能性もあるが、本論ではその指摘のみに留める）。

無論、現段階ではあくまでも、本書本文の出典研究から得られた推定であり、更なる史料等の発見・検討によって、上記の推論を検証していく作業が必要である。

五、『仏祖正伝記』本文からの諸検討

①『伝光録』との類似点と相違点

本書が『伝光録』に関連した文献であることを示す例を挙げておきたい。本書「東土十三祖同安道丕禪師」について、『伝光録』では、以下の本則を中心に提唱される。

第四十祖同安丕禪師雲居有時示云欲得恁麼事ヲ須是恁麼人即是恁麼人何愁恁麼事師聞自悟ス（乾坤院本八四頁）

この雲居道膺の「四恁麼話」は、道元が『正法眼蔵』「恁麼」巻でも本則としており、典拠としては『景德伝灯録』巻十七、『五灯会元』巻十三、他に見え、道膺の示衆語とされる。そして、それらの灯史の同安道丕章には大悟の機縁を載せない。よって、「四恁麼話」を道丕の大悟の機縁にするのは、『伝光録』の独自性だが、本書でも次のようにある。

十三祖。洪州鳳棲山同安道丕禪師（洪州人）初參雲居和尚。充侍司經載。居因示衆曰。欲得恁麼事。須是恁麼人。即是恁麼人。何愁恁麼事。師聞省悟。（三〇九

頁上段)

明らかに『伝光録』の特徴を受け継いでいることが分かる。しかし、相違点もあって、『伝光録』では「師ハ幾計(原文註・ママ、計は許の誤りか)ノ人ト不知」(乾坤院本八十四頁)とあって、出身地は不明であるとしている。しかし、本書は同安道丕の住職地から推定したのか、「洪州人」と明記している。

よって、本書本文の出典研究からは、『伝光録』を参照して編まれたと推定出来るのだが、文脈によっては明らかに相違している場合もある。両者の関係については、更に検討していく必要があるが、それは別の機会にしたい。

②道元禪師章の問題

道元禪師章は、『三祖行業記』道元章を参照して書かれているけれども、本書で唯一、複数の文献を対校した様子が伝わる。

外国人得恁地(一作麼)大事。(三二三頁上段)

これは、道元の「身心脱落話」で、その場に居合わせた広平侍者の言葉だが、天性は「恁地」について「麼」と

『仏祖正伝記』の研究(菅原)

記載された同書を見たという。『三祖行業記』は、『史料集成』に四本の異本が収録されるが、天性が指摘する内容を持つ本は無かった。異本の一つである『三大尊行状記』、または『伝光録』第五十一章に「恁麼地」とあるが、天性の指摘と一致しない。よって、天性の時点で、『三祖行業記』の複数の写本が伝播していたことを指摘するに留める。

③懷奘禪師章の問題

本論「三一」で指摘したが、本書では中国・日本で道号が確認される祖師については、「号に○○と曰う」と明示する。そこで、扶桑歴祖を見ていくと、初祖道元と二祖懷奘に道号の指摘が無い。道元に道号が無かったことは知られていることだが、二祖懷奘には、「孤雲」という道号があるとされる。

そこで、懷奘を受業師とした瑩山紹瑾の著作を検討すると、特に古い写本には「孤雲」の号が見えない。

・第五十二祖永平奘和尚(乾坤院本『伝光録』、奘の字が崩れている)

・永平辨和尚(大乘寺古写本『洞谷記』)

『仏祖正伝記』の研究（菅原）

- ・ 祖翁永平二世和尚（洞谷伝灯院五老悟則并行業略記）
- ・ 永平二代（禅林寺本『瑩山清規』「年中行事」）

よって、本書と瑩山の著作から、懐奘の道号は無かったと推定される。

江戸時代に入り次々と編集された曹洞宗関係の灯史では、『日域洞上列祖行業記』『日域洞上諸祖伝』『日本洞上聯灯録』に全て、「孤雲」の号が見えることから、江戸時代には既に定着していたといえる。

④瑩山禪師章の問題

義介章より以下は、『伝光録』との対照が出来ないため、各々の内容分析を行う。

瑩山章は、瑩山が大乗寺・義介の下で学び、『妙法蓮華経』『法師功德品』の、「父母所生眼、悉見三千界」を見て開悟した一話と、「平常心是道」に関わる問答を行った一話を挙げている。後者は、古写本『洞谷記』にも確認（本書とは字句が相違）され、瑩山が義介によって後継者に認められた一話として知られる。前者も、後の史伝には複数見られるものである。しかし、本書に収録されたというこ

とは、この段階で瑩山の逸話として知られていたと見ることが出来る。または、同話で省悟した祖師に宏智正覺がおり、本書編集のために流用された可能性も指摘したい（後述する峨山伝に、他の祖師伝からの流用が見られるため）。

また、本章では、五十八歳説と六十二歳説とで議論となる瑩山の世寿が判明せず、その典拠として有力な遺偈も収録されない。扶桑歴祖では道元・懐奘・義介・峨山に遺偈があるため、途中の瑩山が抜けていることになる。

後の大乗寺流布本『洞谷記』には、瑩山の遺偈が収録され、現行、それが信じられているが、個人的な印象では、およそ遺偈の内容とはほど遠く、自賛の一首ではないかと考えている。しかも、『洞谷記』の同段では「闍世五十八、坐夏四十六」とあり、現在では用いられない世寿とともに記載され、資料としての価値を損ねている。また、『瑩山紹瑾禪師喪記』（『統書全』「清規」巻所収）に収録される、法嗣・門人による瑩山への祭文にも現行の遺偈への言及は無く、その真偽について検討を要すると思われる。なお、本章末尾には、法嗣である明峰素哲・峨山韶碩の二神足について興味深い指摘があるが、それは先行研究に

譲る。⁽⁸⁾

⑤ 峨山禪師章の問題

峨山章は、峨山が出家して天台の教学・止観を学び（この部分は、『景德伝灯録』永嘉玄覺章の流用か）、その後に入門した様子を伝える。

瑩山の下では「語・黙・動・静・物是・惣不是」という六句に関する問答（典拠は、『景德伝灯録』卷九・虔州処微章）により開悟したという。この問答は、『洞谷僧生和尚法語』（『曹全』「法語」卷、二二九頁）や、『峨山和尚法語』（同上、二四一〜二四二頁）に見える。「教外別伝」を知らしめるための問答だといえるが、教宗と禪宗の関係がしばしば問題視された瑩山門⁽⁹⁾下で、積極的に用いられた一則であったと推定される。

また、峨山が典座となった後、瑩山が大衆に向かつて「月有二枚話」を示した。これは、一般的には「両箇の月」と呼ばれる公案と類似した一則であると思うが、内容は相違している。以下に比較したい。

『仏祖正伝記』の研究（菅原）

・本書峨山章「月有二枚話」

瑩山、有る時衆に示して云く、「月に二枚有り。知人稀なり。試みに道え、看ん」。

衆、対うる無し。

瑩山、侍者を遣り師を詔し、前話を看せしむ。

師云く、「心月豈に二枚有らんや」。

瑩山云く、「你、未だ会せず。且く去れ」。

師、二載を経て、一日、手を拍ちて云く、「月二枚、

知人稀なり」。

瑩山、聞得して而も云く、「此の子、徹せり」。即ち洞上の宗旨を以て、之を付属して云く、「汝、一方を分化して、断絶せしむること無かるべし」。

（三二五頁下段、原漢文）

・「諸嶽二代峨山和尚行実」「両箇の月」

山、翫月の次いで、問うて曰く、「你、月に両箇あることを知るや」。

師云く、「識らず」。

山曰く、「月に両箇有ることを知らざれば、洞上の種

草と成ること能わず」。

師、負屈勵志して酷切す。正安三年十二月廿三日夜半、師、月に対して坐す。山、師の耳畔に於いて彈指一下す。師、此に於いて大悟す。

〔曹全〕「史伝（上）」巻、二十二頁下段、原漢文）

後者の「両箇の月」については、近世以降の主要な峨山伝に収録され、現代でも参照されるため、良く知られるところだが、前者は他の峨山伝に見られない一話である。両者の違いだが、前者は盤山が峨山を洞門の後継者として証明する内容であり、後者は峨山の「大悟徹底の話」である。

よって、盤山―峨山の師資の問答で、「二つの月」に関わる話が二種類伝わっていた、または、前者が最初で後者が後に出来た、という仮説を提示出来よう。しかし、峨山伝は信頼出来る古伝が少なく、仮説の検証には限界があると思われる。

それから、本書では峨山を「總持寺二世」ではなくて、永光寺の歴住として挙げる。總持寺が、明らかな形で永光寺から独立するのは、十四世紀後半から十五世紀半ばに及んだ活動であったとされる。本書の成立時期は、總持寺独

立活動の始まりの頃であり、しかも、天性の所属する無外―無著派はいわゆる峨山五哲からも外れている。

なお、峨山が永光寺・總持寺の両寺に住持し、峨山の塔が總持寺にあることは本書でも明示しており、峨山派も輪住として、永光寺を支える必要があったことは認識されていたと思われる。つまり、本書成立の段階では、永光寺が主で總持寺が従の関係であり、よって、峨山を永光寺の歴住として挙げたと推定される。

⑥無外禪師章と無著禪師章の問題

無外章は、基本的な史伝（生誕、出家、参学、印可証明、寺院開創、遷化）で構成される。そして、特に無外の生誕地については、後の諸伝と明らかに相違している。例えば、『弘化系譜伝』巻二では「高麗人」とし、『日本洞上聯灯録』巻三では「薩州人」とする。現在、一般的には後者の「薩州人」が用いられる。しかし、本書では「奥州人」であるとする。各々がどのような史料・根拠に従って記したか不明であるため、今後更なる検討を要する。

無著章も、基本的な史伝（生誕、出家、参学、開悟、印

可証明、寺院開創、遷化)で構成され、また『弘化系譜伝』巻三、『日本洞上聯灯録』巻四の無著伝にそれぞれ類似した文脈も見えるけれども、大悟に至る機縁は一致しない。よって、更なる検討を要することのみ指摘したい。

ただし、本書成立時期と、天性の法系的立場、住職地の場所などを考慮すれば、少なくとも本書に収録される瑩山伝以下、特に無外伝・無著伝については、後に成立した史伝よりも内容が正確である可能性が高く、よって、各史伝を批判する根拠になり得ると思われる。

六、結論

本論は、天性著『仏祖正伝記』(一三九九年序)について、種々の基礎的研究を行い、今後の検討課題を挙げた。そこで、「序」に記されたのが正しい成立時期だとすれば、以下の諸点については重大な注意を要することが分かった。

- (一) 瑩山紹瑾提唱『伝光録』の影響を受けた現存最古の一本である。
- (二) 著者の天性は『永平寺三祖行業記』の複数の写本

『仏祖正伝記』の研究(菅原)

を見ていた。

- (三) 「洞谷伝灯院五老悟則并行業略記」が伝播していた。

- (四) 瑩山伝以下は最古か、それに近い史伝であり、近世以降の史伝を批判する根拠になり得る。

右記の他には、著者である天性の自称や「永平門下」の意識、懐奘の道号、瑩山の遺偈、峨山の「月有二枚話」など、現在の曹洞宗にも関わる複数の課題が出てきたが、これらは更なる史料の発見・検討を要する内容であり、本論では諸課題の指摘のみに留めたい。

註

- (一) 『仏祖正伝記』の本文は、『続曹全』「史伝」巻所収本を用いる。引用する場合、漢字は新漢字に改めている。他の文献の引用も同様だが、一々断りは入れない。
- (二) 平成二十五年十二月に永福庵を拝登した際に同庵所蔵の寺宝を一通り閲覧し、目録を採った。『校割帳』や『仏祖正伝記』も閲覧している。
- (三) 京都宗仙寺を拝登した際に、寺内にて閲覧している。なお、同寺内には面山が滞在した寿昌庵がかって存在したこと

『仏祖正伝記』の研究(菅原)

で知られ、面山の遷化時にも同寺から喪を発した(『面山年譜』参照)。

(4) 小早川浩大先生『洞上金剛杵』の考察(『曹洞宗総合研究センター学術大会紀要』11、二〇一〇年)を参照のこと。

(5) 平成二十六年八月に泉福寺を拝登した際に寺内にて閲覧した。

(6) 『景德伝灯録』は『大正蔵』巻五十一、『聯灯会要』と『五灯会元』は『新纂大日本統蔵経』巻七十九・八十をそれぞれ参照した。本来は、古版本・古写本の影印・翻刻等を参照すべきだが、今後の検討時に照合を行うこととする。

(7) 道元の道号については、「希玄」が指摘されることもあったが、それは道元に関わる文書に見える別名であり、道号とは認められない。

(8) 佐藤秀孝先生「明峰素哲と峨山韶碩」(『禅の真理と実践 東隆真博士古稀記念論集』春秋社・二〇〇五年)を参照のこと。

(9) 峨山韶碩が瑩山紹瑾に入門する契機となる問答が、天台宗と禅宗との関わりを問う内容であり、また、大本山總持寺に伝わる『十種勅門』の第一が、「祖位教位同別」であったことから推定している。

(10) 永光寺と總持寺については、『永平寺史(上)』第四章・第二節「永光寺教団の成立・分裂と總持寺教団の成立」(四〇〇〜四一頁)を参照した。

参考資料

曹洞宗全書刊行会編『曹洞宗全書』二十卷(昭和四十五〜五十二年)に刊行された覆刻版)、同『続曹洞宗全書』十卷(昭和四十八〜五十二年)を参照。引用等の場合には、それぞれ『曹全』『続曹全』と略記し、巻名とページ数を記載。

永平正法眼藏菟書大成刊行会編『永平正法眼藏菟書大成』正二十五卷・総目録・続輯十卷(大修館書店・一九七四〜二〇〇〇年)を参照。引用等の場合には、『菟書大成〇〇』と略記し、ページ数を記載。

吉田道興先生編『道元禅師伝記史料集成』(あるむ・二〇一四年)を参照し、引用等の場合には『史料集成』と略記。

『三祖行業記』『三大尊行状記』は『史料集成』を参照した。

『伝光録』は東隆真博士校注『乾坤院本伝光録』(隣人社・一九七〇年)を参照し、本論中では「乾坤院本」と略記した。

『洞谷記』は河合泰弘先生『洞谷記』二種対照二―1・2(『愛知学院大学禅研究所紀要』30・31、二〇〇一・二〇〇二年)を参照した。

禅林寺本『瑩山清規』は、尾崎正善先生「翻刻・禅林寺本『瑩山清規』」(曹洞宗宗学研究所編『宗学研究所紀要七』一九九四年)を参照した。

『曹洞宗文化財調査目録解題集3・九州管区編』(曹洞宗宗務庁・一九九六年)を参照し、引用等の場合には、『曹洞宗文

化財目録3』と略記。

『面山広録』は『曹全』『語録三』巻所収本を参照した。なお、

『面山年譜』は『面山広録』巻二十六に収録されている。

『洞上金剛杵』は『曹全』『注解三』巻所収本を参照した。

『弘化系譜伝』『日域洞上列祖行業記』『日域洞上諸祖伝』『日本

洞上聯灯録』は『曹全』『史伝(上)』巻所収本を参照した。

永平寺史編纂委員会『永平寺史(上)』(大本山永平寺蔵版・一

九八二年)

永平寺古文書編纂委員会編『永平寺史料全書』(吉川弘文館・

二〇〇八年以降)

曹洞宗宗学研究所編『道元引用語録の研究』(春秋社・一九九
五年)